

新実践者のオーディションが進行中

新メンバーはどんな人？

高津 佳史

先日のニュースで、大手住宅メーカーの積水ハウスがフジサンケイグループの主催する「地球環境大賞」を受賞したことを報じていた。

「5本の樹」計画という環境配慮型の住宅植栽によって、2001年からの累計で1709万本を植栽したことが評価されたようだ。住宅を購入すると、鳥や蝶に優しい在来種の樹木5本が庭木として付いてくる、というものである。

自宅の庭木なら誰だって一生懸命に手入れする。街路樹や公園の樹木まで気にかける人はよっぽどの植物愛好家だろうが、我が家の庭木は普通の人でも世話をするはずだ。日本なら植えたまま放置しておいても、乾燥で枯れるということも少ないし、マリのように家畜に食われることはないと言えよう。それでも、落葉の処理や小鳥の糞害、毛虫の発生など緑の維持・管理には問題が付きものであり、簡単ではないということが分かる。

庭木の手入れを欠かさない人は、我が家の樹木が好きだから世話をしているだけである。地球環境とか生態系とか、地球温暖化について日々考えて世話をすることは、少ないに違いない。

現在、ファナで進めている「地域苗畑」や「実践者」の支援・育成計画も似たような発想からである。

自分が育てた苗木や自分の畑に植えた木は気になるものである。その点にマリも日本も違いはない。「地域苗畑」の主人や「実践者」というのは、そういった植物好きの人たちのことである。

植物好きの「実践者」は色々なことに興味を持っているようで、飼料や薬用、建材などに使える在来種を自ら植えている人が多いことが分かってきた。いずれも、里山から種子や実生苗を取ってきて植えているのである。その樹種は、実のなる木から、アカシアの仲間やヤシの木まで多様なものであった。

サヘルの森の役割は、こうした植物好き「実践者」たちの手助けをすることにある。種子や育苗資材・情報の提供、苗木購入などが主なものだったが、最近、「新実践者」の育成という項目が加わった。新たな植物好きを見出して仲間に加えようというものだ。現在、第1期の選抜作業（オーディション）が進行中である。どんな仲間が加わるのか、新メンバーに期待がふくらむ。

新実践者紹介① 森林再生に挑むフルベの親子

近年マリの里山の衰退が著しく、村人たちからも木を植えなければという機運が高まっている。サヘルの森で育った実践者から、さらに周囲に里山の再生を広めるべく、新実践者という仲間を迎えている。今回は昨年選抜を勝ち取った一人の新実践者とその父の里山再生をご紹介します。

ファナに育つ保護林

バマコとファナを結ぶ幹線道路からわずか1 km入った所にアルファブグーという小さな村がある。ファナも活動当初から関わりのあるニヤマトブグー、カソマブグーのすぐ隣の村だ。一家族分の家が並ぶ小さな村に着くとそのすぐ脇に鬱蒼とした林が目飛び込んでくる。

この林は、この村の村長のアルファ・ジャッコが、誰にも、たとえ家族にも伐らせない徹底ぶりですべて守ってきたものだ。都市に向けた薪炭材の伐採で森林資源が減少する中、これだけの林が、しかも幹線道路にほど近い場所にあること自体、極めて稀有な存在である。



中高木の多いアルファの保護林

アルファは、ファナから北東に35 km行ったバラウエリ圏のコリコ村でフルベ族の家に生まれた。フルベ族はマリ中部に多く、ウシを中心とした家畜を連れて移動する遊牧民族だ。マリ南部に住むフルベ族はジャッコ家のように定住して半農半牧の生活をしている。

アルファの子供の頃は、乾期の終わりになると家畜に食べさせる草が不足し、今のアルファブグーのある辺りまで家畜を連れてきていた。乾期になっても草が尽きないこの地域に移ってはどうかと父に進言し、家族ともども移住してきた。1970年のことである。

尽きない薪炭材の伐採

大人になったアルファは家族を持ち、非常に気になることができた。他の村の人々が自分の土地の木を切って、薪にしたり炭を焼いたりしている。自分のところで使うだけならよいが、それをバマコの人々に売っているというのだ。「人の欲は尽きない。このままでは林がなくなってしまう。」

アルファはまず入植に当たって世話を焼いてくれたカソマブグー村の村長のところに相談に行く。「自分の林を保護したい」と告げるとそれは良いことだと賛成してくれた。次に土地の所有者であるフガニ村の村長を訪ねる。問題ないとあっさり認められた。最後に森林行政を行う水資源森林局(オゼフォレ)へ行くと、「それは私たちの仕事でもある。ぜひ行ってほしい」と後押しをされた。こうして今から19年前にアルファの森林保護が始まった。

父の背を見て

カオ・ジャッコはアルファの長男で、昨年新実践者としてサヘルの森の活動の仲間に加わった。

彼はつい数年前まで首都バマコの南にあるセレンゲという町の加工工場に出稼ぎに出ていた。

加工工場は周辺で取れるマンゴーから果汁を取る工場で、取った果汁はイタリアに送られジャムにされた。しかしセネガルなどから新規参入の工場ができ、マンゴーの買取価格が高騰、カオの勤める工場は経営が傾いた。カオは父に相談し、村でもやるべき仕事はいくらでもあると村に帰り畑仕事をすることにした。

実を言えば、父が森林の保護を始めた時、「木を伐らせないなんて、何て意地悪なんだ。母も困っているのに。」と思っていた。でも今は違う。父が19年の間頑なに守ってきた林を見て思う。「周りの森林はなくなりかけているが、村には立派な林が残っている。ここには他にはない薬になる大切な木がたくさん残っている。」

今では、カオ自身が父よりも保護に熱心だ。森林の盗伐は夜間行われる。懐中電灯をもって夜間のパトロールも彼が行っている。

息子の決意

アルファブグー村へはこれまでも定期的に苗木を配布してきた。アルファは植林にも熱心で木を伐らずに、木の間のみずかな隙間やジーシラ（雨期の雨水の通り道）などに植えてきた。木の間なので陰になってなかなか生育しなかったり、ウシに頭をこすりつけられ折られてしまったりしたが、それでも何本かは大きく育ち、建築材として使うこともできた。

「母たちは配布してもらった苗木を植えずに枯らしてしまったりもした。枯らしてしまっただけでは、どうしたらいいかわからなかったからだ。」「今はどのようにすれば育てられるのか教えてもらったし、自分でもやってきたので分かる。」

この1年息子のカオは、隣村の先輩実践者バルー・ジャラの支援を受けながら、乾期の植樹や育苗に取り組んできた。また、地域苗畑や他の実践者のところを訪問して、彼らの経験や知識も学んだ。今年自身で育てた苗木を植え育てていく。



保護林の一画にある苗畑に水をやるカオ

子に託す父の想い

アルファは自分の林にどこに何があるのかわかっていて、薬に使う葉や樹皮を採るときにも木に傷がつかないように取る方法を子供に細かく指示する。

数年前バイクの事故で足の骨を折る大怪我をした。それからは自動車を買って、どこかに行くときには、息子に運転させて出かける。それでも、林の中を散歩するのが日課になっている。

散歩していて、少しでもスペースを見つけると、あの木をここに植えたいと思いつくこともある。今増やしたいのは、カリテ（シアバターノキ）、ネレ、タバクンバ。いずれも在来種で、実が食用となる。カリテはシアバターが採れ、ネレは種子から発酵させてスンバラ味噌が作れ、商品価値が高い。

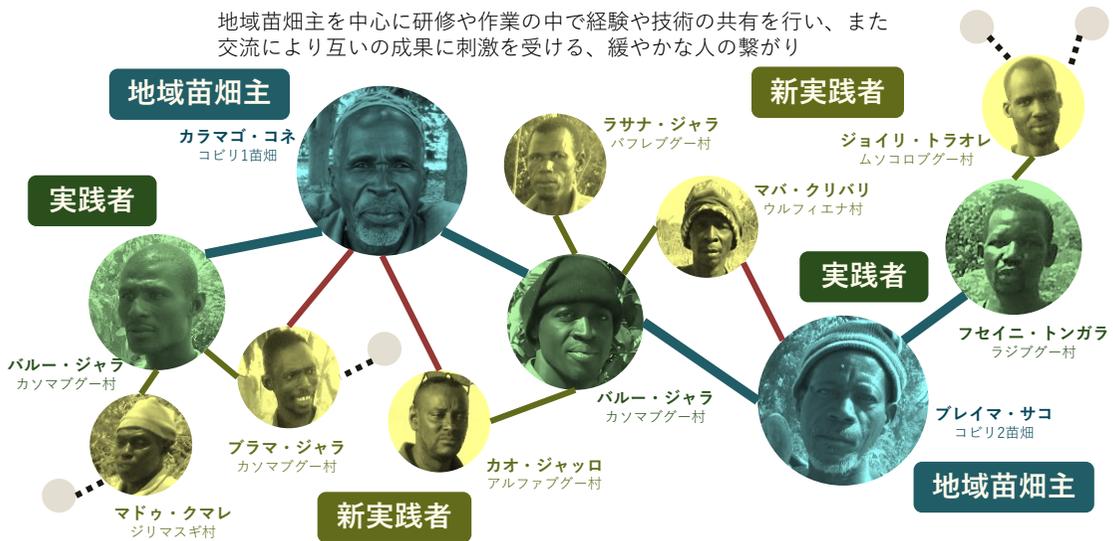
「私が死ぬまでは、林を守り続けるが、その後は子供たちも守ってくれると信じている。」「消えゆく木たちを少しでも子供たちに残したいんだ。」

彼の残す林は小さいものかもしれないが、その価値は子供たちに受け継がれ、そして大きく育っていくように思える。

榎本 肇

里山再生の人的ネットワーク（一例）

地域苗畑主を中心に研修や作業の中で経験や技術の共有を行い、また交流により互いの成果に刺激を受ける、緩やかな人の繋がり



*3月の総会の現地活動報告の中で使用した図です。好評で、ぜひ機関紙に載せてほしいとのことでしたので掲載しました。

地域苗畑—実践者—新実践者と徐々に知識と技術が広まっていく様子を図式化したものです。ここに示した実践者はほんの一部ですので、実際にはもっと大きな広がりとなっています。今後は関わる新実践者を増やしていくとともに、その先の住民への広がりをもどるようにしていくかも考えていきたいと思ひます。このように今後もサヘルの森を通じて緩やかな里山再生の輪を広げていきます。

日本人スタッフのマリ派遣について

新型コロナウイルスの世界的なパンデミックの中、2年以上、日本人をマリへ派遣できませんでした。その間、2回のクーデタ（2020年8月、2021年5月）があり、暫定政権がなかなか民政移行のための道筋を示せず、ECOWAS（西アフリカ諸国経済共同体）が経済制裁を科したり（1月）、フランス軍が完全撤退を決めたり（2月）、他にもマリをめぐる様々な情勢が動き、不安要因となっています。

しかし、コロナの一時的な収束、3回目のワクチン接種、2年間不在に起因する多方面の調整、そして何よりマリの人達からのラブコールもあり、条件付きながら榎本肇のマリへの（2ヵ月）を決めました。

今回のマリ派遣では、榎本は基本的に首都バマコ滞在とし、旧知の現地スタッフと協力してファナ地域での活動を進めることとしました。また、在マリ日本大使館とも情報を共有して、日本人・現地スタッフ共に安全の確保に努めます。状況によっては2ヵ月とした派遣期間を短縮して切りあげることも考慮して、安全第一に、事故に巻き込まれないよう細心の注意を払い、行動していきます。（榎本 肇）

サヘルの森は、日本国内でも里山再生の活動に参加しています。今年11月に「サヘルスタディーツアー」を企画している「さがみの森」について坂場前代表にまとめてもらいました。

フォレスト21 さがみの森の25年を振り返って

坂場 光雄

日本の森づくりの全体を把握するなら、毎年発行される林業白書がある。

ここでは1997年から活動が開始されたボランティアによる「さがみの森の森づくり」を紹介する。1995年、「緑の募金」が法制化され、そのことを記念して、神奈川県相模原市に位置する仙洞寺山国有林の一部、4.5haを活用して、「緑のボランティアの森」記念造成事業を実施することとなった。NPO 森づくりフォーラムと林野庁の東京神奈川森林管理署で「ふれあいの森」協定を結び、ボランティアによる森づくりを実施している。テーマは多様性のある森づくりである。

1997年1月に現地を訪問した時には、全域が皆伐跡地で、急傾斜地の林床には細い枝ばかりでなく、太い曲がった丸太、寸法が短くて搬出されなかった幹材も一面に放置されていた。2月からは月2回の定例活動を開始し、伐採跡地の枝幹を片付け、等高線に沿って並べて植林できるように地拵えを行った。各方面の呼びかけ、報道もあって、3月には100人近くが定例活動に参加があった。

2000年まで4回の植林でスギ、ヒノキばかりでなく、コナラ、クヌギ、イロハモミジ、クマノミズキ、ヤマザクラ、コブシ、カツラなどの広葉樹も植えられた。作業を行うために山腹の作業路も造られた。

その後は大量に生育してきた草やツルを大鎌で刈り払う下草刈りが続けられた。暑い時期、急傾斜地での草刈りは体力的にたいへんで、悪いことに草にまぎれた広葉樹植林木は、天然の発芽生育木、萌芽との区別がつきにくく、誤伐が報告された。また、シカの食害、害虫の発生、雪害による折れ・倒木も目に付くようになった。

10年ほどして、スギ・ヒノキの枝打ち・間伐が始められた。枝打ちは2mの一本梯子を使い、上まで登ると4mほどの高さまでの枝打ちが出来た。間伐はノコギリで伐採し、斜面に並行に並べて、斜面の表土流出防止に役立てた。



間伐作業

樹木が生育すると高さ6mまでの枝打ちを進めた。間伐は樹木が太くなるにつれて、ノコギリだけでは大変になり、チェーンソーも使うようになった。ただ、面積が広いため十分には行われず、林床が暗く植生が少なくなった場所もある。コナラも間伐してシイタケ作り体験も実施している。

2019年10月には台風の大雨で土石流、山腹崩壊が発生し、被害が出たが、尾根から山腹上部は被害をまぬかれた。

参加者は高齢化もあり、人数減少が続いていたが、最近は若い参加者が見られるようになった。定例活動には10~20人程度の参加者がある。作業内容は間伐、除伐、枝打ち、草刈り、補植、ツル切り、作業路補修などさまざまである。

森づくりは持続的な管理が重要である。ボランティアによる森づくりは各地で行われており、機会があれば、現場を見ていただきたい。



作業路づくり



枝打ち作業

今年度の会員総会はハイブリッドで開催されました

新型コロナの感染が続く中、一昨年昨年と2年ほど対面での総会が開かれませんでした。今年度は感染者の数も減ってきたこともあって、対策をいろいろ考えて、なんとか3月27日（日）に市ヶ谷のJICA地球ひろばの会場で開催することができました。（懇親会が開催されなかったのは残念でした！）合わせて遠方の方も含めてオンラインでの参加もあり、ハイブリッドの開催となりました。

会場での参加者はありつつも、基本昨年と同じように書面評決ということでご案内していましたので、64名の方が議案に対して、賛成の意思表明を葉書で送っていただきました。3回目の書面評決の手続きとなりましたが、みなさまには深く感謝いたします。

総会では現地活動について、2021年度は日本人スタッフを派遣できない中、現地スタッフのトラオレさんとコニバさんが、東京と電話やメールでやりとりしながら現地活動を進めてきました。送られてきた写真などを中心に、事務局長の榎本さんから報告がなされました。2022年度は里山再生を引き続き行いながら、特に実践者や地域苗畑主や植林に興味のある村人などの、人的ネットワークに力を入れ、地域を牽引する人材を育て行くことに、力を注いでいく計画です。2年間日本人スタッフが派遣できなかったのも、諸般の事情が許せば、日本人スタッフの派遣を計画しています。

国内活動は多くのイベントや報告会が中止の中、コロナの感染症対策をしながら、「グローバルフェスタ」が久々に東京国際フォーラムで開催され、サヘルの森も参加し、他団体との交流を計りました。また、通常の機関誌の他に、本年度もファナ特集号を発行し、実践者や新実践者の活動を伝えることができました。

会計については会計担当から決算・予算が報告され、監査報告が確認されました。

会費・寄付の振込に関するアンケートの回答

サヘルの森では多くの方が会費や寄付を、ゆうちょ銀行を通じて送金頂いております。今回ゆうちょ銀行の送金手数料が改定されましたので、今後の参考にするために、今回会員のみなさまに送金方法に関してのアンケートをお願い致しました。以下にアンケート内容と結果をお知らせします。これらのご意見を参考にしながら、今後送金方法についても検討してまいります。

Q1 現在どのように振込をしていますか？

- A1. 郵便局窓口から振込用紙と現金で（23%）
- A2. 郵便局ATMから振込用紙と現金で（20%）
- A3. 自身の郵便局口座から振込用紙で（41%）
- A4. その他（5%）
無回答（11%）

Q2. もし変更があるなら、ご希望の振込方法がありますか？

- A1. 今まで通り郵便局の振込用紙で（44%）
- A2. 銀行口座やATMから会の銀行口座へ（21%）
- A3. インターネットバンキングで会の銀行口座へ（14%）
- A4. その他（9%）
無回答（12%）

（米倉 伸子）

サヘル森で見た世界

赤塚 秀子 (会員番号 1336)

私の会員番号は1336番。アフリカに心を寄せた人々が私の前に1335人。私の後にはどのくらいの方々が続いているのでしょうか。

私が会員になった頃は1980年代？、90年代？いつかは忘れてしまいましたが、世界的な砂漠化が進んでいるということが、声高に言われていたように思います。

すでにずっと前から言われていたのかもしれませんが。私の意識がやっとそちらに向いたので、森林が失われていくことが大きな問題を孕んでいることに気付いたのかもしれませんが。

幼い頃、「野生の王国」というドキュメンタリー番組があり、主にアフリカの動物の生態を映し出したものでしたが、家族は珍しい動物たちの姿を面白がって見ていました(私は動物たちの狩猟場面や逃げ惑う場面などが苦手であり楽しめませんでした)。また、「ターザン」などのハリウッド製のアフリカをロケ地にした大作映画などが、私のアフリカの基本的な稚拙なイメージでした。それはあまり更新されず、アフリカは遠い大陸のままボンヤリと大人になりました。

砂漠化という言葉が気になりだした頃、アフリカの国々の国境線の直線が気になりだしました。まずは、遮るものもない広大な土地だから、こんなに潔く国境ができるんだと能天気にも思いました。

次に、アフリカと大国といわれる西欧諸国との関わりを歴史から知っていくと、真つすぐな国境線がそんな単純なものではないとわかり、自分の無知を本当に恥ずかしく思いました。が、まだまだ、そこに生まれ、朝起きて、仕事したり、誰かと食事したり、遊んだりしたり、と日々暮らしている人々を脳裏に浮かべることがあまりありませんでした。

そして、198?年夫の友人を通して、「サヘルの会」を知りました。そのころには砂漠化を食い止めるための植林活動をしている組織が数々あることは認識していましたが、過酷な環境下の現地の人々の、生活の安定と植林という発想がとても腑に落ちたというか、にわかにはアフリカの人々に血が通いだし、動きだしました。合理的で素敵な活動だと思いました。

乾ききった茶色い大地に緑の点々が散りばめられ、しだいに点々は大きくなり、熱風はその木陰を通るたびに潤いを帯びて、人々や動物たちは安らぎ、足の下に水はあるかもしれないという希望が湧いてくる。ちょっと感情的な表現になり過ぎたかもしれませんが、そんなことを実践しようとする団体が、人々が、こんな身近にいるなんて！と感動しました。

植物が成長する時間は早めることは出来ません。定められた過程を経て繁茂していきます。そして人間のさまざまな行為がしばしばそれを阻みます。それでも、地域の人々と共に着々と植えて育てていく。

枯れたらまた植える、その場にあった育て方を試行錯誤する。それとともにそこに暮らす人々の意識も変えていく。遠い先にある成果のために粘り強く続けられる活

動に、会費を納めるだけの会員ですが、感動し続けています。

マリの政情不安、紛争で日本から行くことができない、更にコロナ禍でまたまた行くことが出来ない。「サヘル」の森」の活動は大丈夫だろうか、現地では「サヘル」の森」の活動から心が離れないだろうか。と心配してしまいますが、会報を読み豊かに育っている木々の写真を見るたびに、大丈夫だ、現地の人々の活動も根付いていると胸をなでおろすのです。

あの時植えた木々がこんなに育ちました。果実が収穫できました。生活の糧になりました。という記事はとてもうれしくなります。急激に減少していく緑に追いつくことは出来ないけど、まだまだなくならないぞ。増えていくぞ！という希望を持つことができるのです。

先日、行きつけの整骨院に行ったら、その先生が「飯能の奥の方の山を買ったんだよ。在来種の植物を守りたいのと、自然の中で過ごす楽しみを子どもたちに伝えたくて。そこにいるサンショウウオも守りたいんだ」と言っていました。私は「サヘル」の森」のことを話し、自然を守るために人間が手を差し伸べ続けなければならないですね、ということをお話しながら施術してもらいました。こんな話題がもっと増えるといいなと思います。

.....
会員番号は整理のための数字ではない。会員番号にはひとつずつのドラマと想いがある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。

(サヘル)の森)

七夕募金のお願い

コロナ禍の終息と平穏な日常の再開を願って、七夕募金へのご協力をお願いします。めています。多くの皆様からご協力をいただければ幸いです。

募金には、同封の振込用紙をご利用下さい。マリでは昨年のクーデターに続き、民政移管の時期を巡って周辺諸国から経済制裁を受けるなど不安定な状況が続いています。さらに、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で物価上昇が庶民の暮らしを圧迫しています。そんな中ですが、この度2年ぶりに日本人スタッフを派遣することができました。現地スタッフと共に、学校への苗木配布や実践者を中心とした里山再生を進めていきます。

振込用紙ご記入時のお願い

会費やご寄付でお振込み頂く際、振込用紙に領収書の要・不要を必ずご記入ください。尚、サヘル」の森」は寄付等による所得控除の対象になりません。ご協力のほど、よろしく申し上げます。

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘル」の森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000 円
- ・維持会員 年 20,000 円

特定非営利活動法人 サヘル」の森

住所：〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3-403
TEL：042-721-1601 (留守電対応)
郵便振替口座：00170-6-115054

HP：http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/
BLOG：http://sahelnomor.exblog.jp/
E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No. 110 2022年7月3日発行
発行人／編集：高津佳史
